

「赤いシカの伝説」

さねとうあきら著

子どもは現実を具体的な目で見ていく。だが多くの大人はその現実を無意識に避け、観念の世界に心を落ち着けようとする。さねとうあきらの作品は差別の構図を具体的にズバリと書く。子どもを生活者と見ず、夢の中にすむかのように描く他の作品と比べ、『児童文学』の本質を考えさせられる点はこのにある。

舞台は今から千二百年前、平安京が開都したころ、はるか東北の北上川のほとりで都の軍勢と原住民のエゾは戦っていた。戦のさなかカリペはエゾの娘と和人の間に生まれる。やがてエゾの戦士として育ったカリペは自らの出自を知り、一人、京に住む親に会いに行く。だが、すでに母は死んでいた。僧になつたカリペはそこで同じ境遇に生まれた青虫という少年と会い、大和からとられたものを己の手でとりもどすべく、盗賊となる。

題名の『赤いシカの伝説』とは自分を獲物



光に歴史から側面の民衆

とせず育ててくれた老オオカミを、今度は命がけで守ろうとしたエゾに伝わる赤いシカの話である。それを聞かせた叔父はカリペに言う。「相手がオオカミだろうと、傷ついたものをいたわるのがエゾの掟。お前の母は掟を裏切らなかつたばかりに、裏切り者にされた」と。その赤いシカの彫り物をお守りに持つ青虫が一度はカリペをだまし撃つが、エゾの血にかけ、助けに来るシオンは狂巻だ。赤いシカとオオカミ、カリペと青虫は立場こそちがえ、権力者に翻弄される大衆そのものなのだ。大衆同士は、『知る』ことで互いの心を映しとり、いつしか理解を深めていく。

「経済ばかりか、軍事面でも、湾岸戦争をきっかけに次々にタブーが破られ、憲法違反の海外派兵まで実現してしまいました。『個々の幸せ』を踏みにじる国家の黒い影が、刻々と濃さを増していくのは、実に不安です」

初版以来、二十五年して復刻に踏み切った動機を作者はこう書く。大国が今、屁理屈をつけて他の国へ攻め入ろうとしている。そんな時代だからこそ教科書にのっていない歴史を掘り起こし、きつちり子どもたちへ民衆の側から光をあてた作品をとどける意味は大きい。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

花伝社、発売 共栄書房・1714円

◇さねとう・あきら 1935年東京都生まれ。児童劇・児童文学の両分野で仕事を続けている。著書に「ジャンボコッコの伝記」など。